

# 話の真宗のやさしい

## 第31回

近頃のように、事件の多い世相を見聞しますと、つくづく宿業（シユクゴウ）ということについて、考えさせられます。

同じ人間に生れたその始めは、みんな赤ん坊であります。赤ん坊には貴賤貧富の差はありません。それが成長するにつれて、千差万別に変化してゆきます。子供をりっぱに幸福に育てようと思つて親心はみな一つであります。親心に甲乙の差別はありません。にもかかわらず、育つ姿には色々の変化があります。

あらましに言つて、長命のものがあり、短命のものがあり、殺されるものがあり、自殺するものがあり、天災地変にあって死ぬるものがあり、交通事故にあって生命をうばわれるものがあります。名をあげ身を立って富をうるものがあり、一生涯暗いかげにおかれて貧に苦しむものもあります。

人間の千差万別の姿は眼前に見る通りであります。

何が故に同じ人間に生れながらこのような差別のある姿になってゆくかは、目に見えぬ前生の業の結果であります。

所で、こうした宿業にわざわいされずに、すべての人々が安らかに、しあわせに暮してゆける世界はないでしょうか。

ございます。お浄土です。お浄土のことを一名無差別平等一如の世界と申します。又、願力報土（ガンリキホウド）とも申します。

これは人間の宿業を悲しまれたらほとけさまが、すべての人々を無差別平等の世界に安住せしめたいと願われたその願いと、それをなすとけるチカラによって生成された仏心の世界であるからです。しかも更にゆきとどいた親心は、ナムアミダブのコトバをもつて、そのことをお知らせ下さつてあります。さればナムアミダブはほとけの呼び声です。すべての人々が無条件で、お浄土に安住することのできることを宣言せられた呼び声であります。それはまた、宿業を離れて、永遠の安住をねがう人間のタマシイの絶叫を満足せしめる呼び声であります。

### 御芳志

◎ 年 回 志

- 一金 貳千円也 沖原 周一殿
- 一金 参千円也 赤崎 忠殿

一金	貳千円也	村中	博殿	一金	貳千二百円也	藤重	太市殿
一金	貳千二百円也	玉坪	源治殿	一金	貳千円也	福田	義浩殿
一金	貳千円也	清水	武殿	一金	貳千円也	田名加鹿	義殿
一金	貳千円也	高橋	竹男殿	一金	貳千円也	森上	博殿
一金	貳千五百円也	広本	博殿	一金	貳千円也	水上	静生殿
一金	参千円也	野上	和夫殿	◎	葬儀、中陰志	河井	ハル殿
一金	貳千円也	河本	サダ殿	一金	九千円也	父のため	
一金	貳千円也	岡部	宗一殿	泉 追	時藤	測殿	
一金	貳千円也	西岡	文一殿	參万二千円也	母のため		
一金	貳千円也	竹田	真殿	黒 磯	森本	正人殿	
一金	貳千円也	広田	尚敏殿	貳万円也	妻のため		
一金	貳千円也	今井	花子殿	藤 生	野原	平一殿	
一金	貳千四百円也	銀	寿雄殿	◎	葬儀、永代経、中陰志		
一金	貳千円也	村重	賢治殿	一金	貳万三千円也	二女のため	
一金	貳千五百円也	木村	登殿	南 町	中崎	隆殿	
一金	貳千円也	佐々江	進一殿	四万三千円也	父のため		
一金	貳千五百円也	高林	一男殿	保 津	赤崎	忠殿	
一金	貳千円也	村上	司殿	貳万二千円也	母のため		
一金	貳千円也	杉本	覚殿	本呂尾	村重源	太郎殿	
一金	貳千三百円也	松尾	彌之輔殿	◎	永代経 志		
一金	貳千五百円也	村重	武一殿	一金	貳万円也	父母のため	
一金	貳千円也	中崎	徳太郎殿	在大阪	廣本	薫殿	
一金	貳千三百円也	河本	靖郎殿				
一金	貳千円也	田坂	真清殿				
一金	参千五百円也	藤中	照人殿				
一金	参千円也	杉田	宝殿				
一金	貳千円也	岡崎	栄殿				
一金	四千元也	蔵重	鎮雄殿				
一金	貳千二百円也	谷林	豊殿				
一金	貳千円也	岡野	ヒナヨ殿				
一金	貳千円也	通谷	正純殿				
一金	貳千円也	岡田	清五郎殿				



# 話の真宗のやさしい

## 第32回

四月から始まった今年の長雨には農作物等の被害も多くありましたが私達にとっても気分がユウウツで、『雨はもうたくさんだ』『いいかげんで止まんもんか』と悲鳴にも似たウラミの声がいたる

所で聞かれました。

所で、本願寺前門主大谷光瑞上人の著書『無題録』には、

『人の情、晴を好み雨を悪（ニク）む。然れども周年雨なきは砂漠（サバク）なり。人、生息（セイソク）すべからず。オランダ領ジャバ島バイテンゾルフは、一年二百二十日雨を算す。然れども総督府を置けり。故に好む所と悪む所とその実を反せり。世人の苦楽を云う者、おおむねこの類なり』

こうしてみると、私達の云いぶんには、得手（エテ）勝手な所がたく

さんあるようです。日照りがつづけば雨がよいといい、雨がつづけば日照りがよいという。その時、その時の自分の都合で、一切の物事を支配しようとしています。この自分本位の得手勝手な心と行動を、仏教では『我執、我欲』（ガシユウ、ガヨク）と示されています。そして『一切の苦しみは欲より出でてその身をなやます』とも示されています。

所が、私達の考えはま反対です。私達がいろいろの問題をかかえて、苦しんだりやんだりするのは、金がないから、物がなから、相手の仕打が悪いからだときめこんでいます。それ故、金さえあれば、物さえあれば、みんながよくしてくれさえすれば、自分はどんなにか仕合せであらうにと、取ることに、握ることに夢中になっています。

しかし、仏教の示される所は、人間は、いかに衣、食、住、財宝にめぐまれても、『我執、我欲』の根性が根こそぎなくならない限り、人間の苦しみやなやみは、永遠に消滅しないということだす。

ほとけさまとは、我執我欲の心のほどけたおかたであるとも云われて

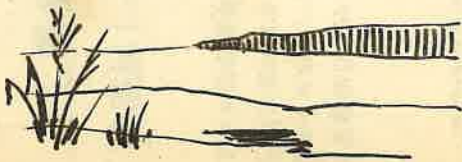
います。されば、ほとけさまには我執、我欲の心はミシンもございません。それに反して、私達はいかに修養しても、我執我欲の心から離れさせることはできません。できません故に、我欲から離れきった清らかで尊いみほとけの心を心とし、そのお心に背（ソム）かぬように生きてゆくのであります。そこに真実の法を生きたただ一つの道があります。

（一頁よりつづく）

- 一金 壹千五百円也 藤中 助生殿
- 一金 貳千円也 竹田 若一殿
- 一金 壹千円也 木村 猛殿
- 一金 壹千円也 藤中 新殿
- 一金 壹千円也 赤崎 登殿
- 一金 壹千円也 村中 慶吉殿
- 一金 壹千円也 村井 助治殿
- 一金 壹千円也 敵狭 宇吉殿
- 一金 壹千円也 榎本 保殿
- 一金 壹千五百円也 村井 仲人殿
- 一金 壹千二百円也 神田 九一殿
- 一金 貳千円也 広本 浅市殿
- 一金 貳千円也 白木 サト殿
- 一金 壹千円也 浅井 昭三殿
- 一金 壹千円也 高林 ウメ殿

◎ 葬儀、中陰志

- 一金 參千円也 森上 光義殿
- 一金 六千円也 祖母のため
- 由 宇 蔵田 桂治殿
- 泉 迫 祖母のため
- 泉 久人殿
- 兄のため
- 山元 省三殿
- 黒 磯





# 話の真宗の

## (第33回)

有名な文豪、森鷗外の短篇小説に「高瀬舟」というのがあります。喜助という三十才位の男、弟を殺したという無実の罪のために遠島に処刑せられました。京都の高瀬川を川船にのせられて川を下って行くのですが、本人は悠然としてゐる。今にも鼻歌でもうたいかねない様子なので、ついて居った羽田庄兵衛という役人が、「どうしてお前はそんなにノンキなのか、普通の罪人は身も世もあらん程に泣きくづれるのにお前はどうしてそう平気で居れるのか」とたずねると、喜助は、「今までの生活が非常に苦しかった。働いても働いても生活は楽にならない。それで今まで一文の貯えき

えも持ったことがないのに、こうして二百文の小づかいをいただいて島にゆくことができるとういういうありがたいことか。私はこれを元手に大いに働きたい」と平然としているのでした。

役人の庄兵衛は自分の生活とくらべて、自分は母親と妻と子供四人の七人暮し、生活の苦しいのは同様である。いつも不足勝の生活をして居て、一日として満足したことがない。それなのに、貧しいことにおいてははるかにひどい喜助にどこからこの安心と落ちつきが出てるのであるうかと、驚嘆して居るのであります。

以上が「高瀬舟」のあらすじであります。私達に考えさせるものをふくんでおります。お経をいただいてみますと、ほとけさまのことを別名で、「調御丈夫」(チヨウゴゾウブ)と呼んでい

ます。これは、自らの心の調子を立派に整えて、ほとけさまとしての尊厳を完全に保持しておられるお方という意味であります。これを現代の新しい言葉で云えば、「主体性の確立」ということにもなります。所で、この頃の私達はとかく心の調子を乱しがちです。いそがしい、いそがしいで、日夜何かに追い廻されていきます。それがお金であったり、地位であったり、名声であったり、とにかく自分というものを見失うて

いることが多くあります。『調御丈夫』のほとけさまにあやかつて、一日も早く自らの調子をと

りもどしたいものであります。

### 御 芳 志

#### ◎年 回 志

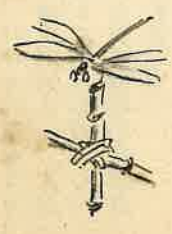
- 一金 参千円也 泉 ヨネ殿
- 一金 参千円也 平川 政一殿
- 一金 参千円也 吳田 英雄殿
- 一金 参千円也 村岡 潔殿
- 一金 参千円也 土井 林一殿
- 一金 貳千円也 穴水 徳幸殿
- 一金 参千円也 倉重シノエ殿
- 一金 参千円也 崎本 高市殿
- 一金 参千円也 村上 仲殿
- 一金 参千五百円也 村岡 住人殿
- 一金 参千五百円也 沖原 周一殿
- 一金 参千円也 津谷 哲彦殿
- 一金 参千円也 上田 修一殿
- 一金 参千円也 岡林 茂生殿
- 一金 参千円也 白木 辨殿
- 一金 参千円也 村河 助雄殿
- 一金 参千円也 米本 時夫殿
- 一金 参千五百円也 太田 文次殿

#### ◎葬 儀、永代経、

- 一金 参千円也 藤重 文雄殿
- 一金 四千円也 角井 英次殿
- 一金 参千円也 岡崎 斌殿
- 中陰 志
- 藤生 土井 正信殿
- 保津 畝狭 藤人殿
- 保津 七千円也 妻のため
- 保津 山近 頼人殿
- 本町 沼田 信雄殿
- 青木 父のため
- 青木 木村八重子殿

#### ◎永 代 経 志

- 一金 参 万 円也 先祖のため
- 青木 藤本 勝殿



# 話の真宗のわさしい

第34回

池田政権の重大政策の一つに「人づくり」が挙げられています。

そして、この政策を具体化するため有識者を集めて、既に四回にわたり「人づくり懇談会」が開かれていいます。所が、最近この名案もゆきづまりの状態にあることが報ぜられています。

まず。その原因は、お手本になるべき「人間像」がさっぱりつかめないからです。

云いかえれば、「人づくり」が「人づくり」というのはよいが、そんなら一体どんな人間をつくり出せばよいのかということになると、議論百出でさっぱり見当がつかなくなつたからです。誠に皮肉な話です。

こういう報道を耳にいたしますと、私達は今更ながら、私達の祖先が千三百年前の仏教伝来時に示した英智を思い出します。

仏教が日本に伝来したことの初まりは、キンメイ天皇の十三年、朝鮮はクダラの王室から日本の皇室に対し、一体の仏像と若干の経巻が贈られたことに始まると伝えられています。そして仏像を拜せられた天皇が

驚嘆して「西の国、たてまつれるみほとけのみかおきららし、もはらいまだかつて見ず」とあります。この言葉からすると、仏像の温容の中に人間にない人間以上のものを発見せられたのであります。

崇高な表情、平安と慈悲をたたえた温容に接する時、われらの祖先は、仏像の中に初めて「人間の手本」「崇高なる人格の曲型」を見出したのであります。

そして、更に重大なことは、われらの祖先たちは、仏像の中に「人間の手本」を発見しただけに止まらず人間の目標を知りました。人間は「仏」になるためにこの世に生れてきたこと、生れた以上は「成仏」(ヘジヨウブツ)すべきであることを知つたのです。成仏といえよ、とかく死ぬることの意味に使われていますが、そうではありません。人間の究極の目標を云うのであります。

人間が何のために生れたのか、いかに生きればよいのかという、人間に生れた目標をはっきりつかんだことほど合せなことはありません。

その点、われらの祖先は、人間に生れた所詮は個人の立身出世や成功繁栄が理想ではない。

人間の理想は実に成仏あることを一人体の仏像を通して教えられたのであります。

ります。人間成仏。人間像から仏像え。人づくりはここに完成いたしました。

## 御芳志

### ◎年回 その他志

- 一金 壹千円也 二家本益人殿
- 一金 壹千円也 宮本 務殿
- 一金 貳千円也 黒田 登殿
- 一金 壹千円也 大原 園枝殿
- 一金 壹千円也 谷林 豊殿
- 一金 壹千七百円也 弘中 文介殿
- 一金 貳千円也 米奥 善登殿
- 一金 壹千円也 上田 繁人殿
- 一金 壹千円也 土井 喜一殿
- 一金 貳千円也 松村 久雄殿
- 一金 壹千円也 橋本辰太郎殿
- 一金 壹千円也 竹岡 新一殿
- 一金 壹千円也 岸本 善一殿
- 一金 壹千円也 倉重シノエ殿
- 一金 壹千円也 中崎 隆殿
- 一金 貳千円也 岡村 裕殿
- 一金 壹千円也 中崎 正視殿
- 一金 貳千円也 小山 焜殿
- 一金 壹千円也 土井 和代殿
- 一金 参千円也 石垣 常美殿
- 一金 壹千円也 野上 謙一殿
- 一金 壹千円也 杉中 与殿
- 一金 壹千五百円也 佐々江邦徳殿

### ◎葬儀 中蔭志

- 一金 貳万参千円也 父のため
- 青木 土井 保殿

### ◎葬儀 志

- 一金 壹万五千円也 夫のため
- 本呂尾 大倉 政江殿
- 一金 壹万五千円也 父のため
- 火打岩 藤中 新殿

### ◎永代経志

- 一金 貳万円也 豊国家先祖のため
- ハワイ在住 部良 早美殿
- 一金 参千円也 妻のため
- 本呂尾 後川 九一殿



# 話の真宗のやさしい (才35回)

ある新聞の家庭欄に、次の一文が出ていました。

ママの日記から  
いまの子どもには宗教心がないとい  
うのか、もの考え方が現実的にな  
ったというのか、仏壇にお供え物  
やお線香を上げる用を頼んでも、す  
なおに言うことを聞かない。

それをしかるとママに  
お茶やお菓子を上ぐるなん  
て迷信だ。仏さまは何も食  
べやしないのに、クブツ  
クサ言いながら、仕方なし  
に仏壇にお茶やお菓子を  
こんでゆく。

ところがある日、かわい  
がっていた犬がとつぜん死  
んだ。子どもは毎日のよう  
にその犬のことを思い出し  
て、このお菓子をジョンに  
食べさせてやりたいいな  
どというので、ジョンはも  
う死んだのだからお菓子な  
んか食べられないと言っ  
てやるとママでもやっぱり食  
べさせてやりたいという。

そこで、ママに仏壇にお供え物をするの  
もそれと同じ気持なのよ、という  
とママはわかっていた。これからは  
ジョンの分もいっしょにして、お供え物  
をたくさんあげようよ。

ママも食べもしないのに、お供えする

ママも食べもしないのに、お供えする

ママも食べもしないのに、お供えする

ママも食べもしないのに、お供えする

それはおまそソロバンにあわな  
いかけたことです。しかし、ソロ  
バンにあおりがあうまいが、そ  
うせずにおれない所に、心の安  
住があるようです。それは心の  
ふるさとに落ちていた心地です。

しんらんさまのお言葉に、浄土宗  
の人は愚者になりて往生す、又  
往生にはかしこき思いを具せず  
して、余りにも多くのかしこ  
き思いをこしらえずにいます。そ  
して、そのかしこき思いが、実  
に私達自身をどれほどキウクツ  
なものにして、そのかしこき思  
いをするのでしようか。もっと  
スナオで、おおらかで、天真  
ランマンであってはいけないの  
でしようか。

かしこき思いは生存競争の激  
しいこの世を生きる大きな武器  
であります。それ故、ネコもシ  
ヤクシも、勝て勝て負けるな、  
追ひ抜け追ひ越せ、とかしこ  
き思いをふり廻しています。

しかし、愚かな者が愚かな心  
に立ちかえる静けさ。そこにこ  
よなき心の平安があるよう  
です。

ママも食べもしないのに、お供えする

ママも食べもしないのに、お供えする

ママも食べもしないのに、お供えする

ママも食べもしないのに、お供えする

## 御芳志

◎ 年回、その他

- 一金 式千円也 藤本 巧郎殿
- 一金 壹千円也 岡崎 員人殿
- 一金 式千円也 富士川 嘉人殿
- 一金 壹千円也 河本 端郎殿
- 一金 壹千五百円也 榎本 俊殿
- 一金 式千円也 中本 栄太殿
- 一金 壹千円也 伊原 繁人殿
- 一金 式千円也 藤井 謙介殿
- 一金 壹千円也 山根 優殿
- 一金 壹千円也 野上 謙一殿
- 一金 式千八百円也 多山 円槌殿
- 一金 式千円也 弘中 磯殿
- 一金 式千円也 森上 光義殿
- 一金 式千円也 上田 政雄殿
- 一金 式千円也 角井与太郎殿
- 一金 式千円也 尾上 慶生殿
- 一金 壹千八百円也 木村一二三殿
- 一金 壹千円也 藤本 杉男殿
- 一金 壹千五百円也 野原 輝人殿
- 一金 壹千三百円也 浴広 誠殿
- 一金 式千円也 野原 輝人殿
- 一金 壹千円也 大崎 文雄殿
- 一金 壹千円也 末広 照二殿
- 一金 式千円也 穴水 忠生殿
- 一金 壹千円也 野崎 武久殿
- 一角井 房助殿
- 一角井 英次殿

◎ 永代経

- 一金 壹千円也 松岡 雅夫殿
- 一金 六千円也 先祖のため
- 黒磯 白木 貸殿
- 六千円也 父のため
- 青木 井上 正子殿
- 式万円也 父のため
- 青木 土井 保殿
- ◎ 葬儀、永代経、中陰
- 式万円也 父のため
- 海士路 川本 淳殿
- 壹万二千円也 母のため
- 山田 村岡 旭殿
- 参万円也 父のため
- 青木 高林 武殿
- 八千円也 父のため
- 保津 山近 哲夫殿
- ◎ 葬儀、中陰
- 七千円也 養母のため
- 本町 村重 博文殿
- 式万円也 養母のため
- 中柴 仲絵殿







# 話の真宗のやさしい

(37)

五月十四日は、本願寺中興の宗主として仰がれている蓮如上人(レンニョシヨウニン)の祥月命日に当ります。

上人は今を去る五百五十年前、応永二十二年の春、京都東山なる大谷本願寺において誕生

せられました。以来明応八年五月十四日京都山科本願寺において遷化せられるまで、八十五年の生涯は、戦乱の時代相を背景にハラン万丈の連続でした。

六才の時、生みの母に生き別れ、その上、当時の本願寺の実情は困窮の極みで衣食にこと欠くありさまでした。しかし、一宗再興の念願にもえる青年蓮如は、修学に専念し、四十三才にして本願寺第八代の門主を継承せられた。

上人の継職によって、それまで沈滞していた本願寺もようやく活気をとり戻し、次第に参集する門徒の数がふえてきました。しかし、それだけに世間の風当りも強くなり、上人

継職後八年目、寛正六年正月、大谷本願寺は暴徒の襲撃にあい、堂宇の全部を破却せられました。上人は止むなく祖廟のある大谷を離れ、近畿北陸の各地を転々移住し、身にしみて辛酸をなめられました。おまけに

当時の世相は応仁の大乱等により人心は麻の如く乱れ、家庭的には二度三度奥方に死別するなど、全く困難な境遇に立たされました。しかし、そうした中にあっても、上人は民衆の中に入って、片時も布教伝道の手をゆるめず、次第に本願寺の勢力をひろげてゆかれました。そして、遂に文明十二年京都山科に本願寺を再建せられました。それは寛正の法難以来実に十五年ぶりのことでした。

上人の御功績の第一は、足にワラシのハナオのあとが喰いこんでおったといわれる如く、晩年まで足まめに仏法宣布のために、各地の民衆をたづねてお歩きになったということです。

第二には、現在でも勤行(おつとめ)のあとで拝読する「御文章」によって知られている如く、当時の人々にわかりやすい文章によって、真

宗の極意を伝えられたことであります。

最後の遺詠は、  
「我れ死なば、いかなる人もみなともに、雑行(ソウギョウ)すててミダをたのめよ」  
明治天皇は、明治十五年に「慧燈大師」の称号を贈られました。

## 御 芳 志

◎年 回 そ の 他

- 一金 二千円也 沖原 周一殿
- 一金 二千円也 藤重 春治殿
- 一金 壹千円也 河本 律雄殿
- 一金 壹千円也 佐々辺義隆殿
- 一金 壹千五百円也 尾上 慶生殿
- 一金 二千八百円也 村本 頼一殿
- 一金 三千円也 村井 助治殿
- 一金 壹千円也 竹中 寅生殿
- 一金 壹千円也 吉兼 卓美殿
- 一金 壹千五百円也 時藤 測殿
- 一金 壹千五百円也 広本 博殿
- 一金 二千五百円也 野原 輝人殿
- 一金 二千五百円也 蔵重 実一殿

◎年 回 永代経

- 一金 五千円也 白木 晋一殿
- 一金 二千円也 国重 一夫殿
- 一金 二千五百円也 地中フジノ殿
- 一金 二千元也 土井 貢殿
- 一金 二千五百円也 森本 正人殿
- 一金 二千円也 広田 尚敏殿
- 一金 二千円也 森上 光義殿
- 一金 壹千五百円也 藤本 一三殿
- 一金 三千円也 山元 敏男殿
- 中崎 隆殿
- ◎葬儀・永代経
- 一金 貳萬五千円也 母のため
- 南 町 杉本 昇殿
- ◎葬儀・中蔭
- 一金 壹萬二千円也 母のため
- つつみ住宅 増田 勉殿

# やさしい真宗の話

## 第38回

(火の中にあつて炭だねをく、水の中にあつて飲み水なし)とは、このたびの新潟地震の被災者の嘆きの声でありました。被災者は、いあゆるの困難に出くわしましたが、飲料水の不足には深刻な不安とあせりを

感じたりよりで、テレビなどの被災地からの報導も、ヤカン一杯の飲み水の配給をうけるため、何時間も長蛇の列をくんで待っているすがたをうつつして、この点を強く訴えていました。もちろん、住居を失い食料も不足し、衣料や薬品類などが自由な被災者も多いでしょうが、人間にとって水がないというほど日常生活で不自由なことはないでしょう。なんとすれば水はいのちのツナであるからです。そうしてみると一杯の水一その中には実に無限の生命力がこめられてい

ていません。新潟市のような災害にあつて、飲み水に不足すると、初めて一杯の水のありがたさが身にしみてわかるのですが、とかくめぐまれ過ぎてかえつてもののネウチを見失つていようです。殊に現代の如く大量生産、大量消費の時代に、すたとかくもののネウチを判断する基準が数量の多少によってカンタンにきめられ、ものの本質的なネウチが見失われがちであります。

さて前置きが長くなりましたが、ナムアミダブについてもこれと同じようなことが言えそうです。ナムアミダブは、今日も日本国中の人の口や耳にたしされていきます。所がそれほど普及しているこのコトバもともすれば、その真意がわからなため、いたずらに奇妙な声をはりあげてひやかされたり、葬式や法事の時のおマジナイコトバとして敬遠されていようです。

しからは、ナムアミダブはいかなるコトバでありましょうか。ナムアミダブは実に真宗の御本尊(ゴホンゾン)であり、このコトバの中にはみほとけの限りなきいのちと光りがこめられています。

それ故、しんらんさまはナムアミ

ダブの広大な恩徳をたたえられて、「帰命無量寿如来、南無不可思議光仏」(キミヨウムリヨウジュニヨライ、ナムフカシギコウブツ)と拝まれています。

又蓮如(レンニヨ)さまは、これを更にくだいてわかりやすく、「ナムアミダブと申す文字は、そのかすがわづかに六字であるから、大した功能があるようにも思われないうちには、無上(このうえなし)甚深(さわめてふかし)の功德(クドク)利益(リヤク)の広大なるものがこめられてある」と、さとされています。

### 御芳志

#### ◎ 年回その他

- 一金 貳千円也 米重 健造殿
- 一金 貳千円也 賀屋 正雄殿
- 一金 貳千円也 村井 俊治殿
- 一金 壹千円也 中尾 恒輔殿
- 一金 壹千円也 米本 島男殿
- 一金 壹千円也 賀屋 公之殿

#### ◎ 永代経

- 一金 參千円也 松重 武男殿
- 一金 貳千円也 津村 節義殿
- 一金 貳万參千円也 中陰 永代経 夫のため

- 保津 藤崎ヨネ子殿
- 一金 壹万八千円也 祖母のため
- 青木 土井 貢殿
- 一金 四万五千円也 祖母のため
- 青木 高林 雅信殿

- 一金 壹千五百円也 上田 正雄殿
- 一金 貳千円也 野原 平一殿
- 一金 壹千円也 賀屋 義殿
- 一金 參千円也 村本サチエ殿
- 一金 壹千円也 今本 楠雄殿
- 一金 貳千円也 杉中 与殿
- 一金 貳千円也 古川 勇二殿
- 一金 壹千円也 松本 嘉市殿
- 一金 壹千円也 野上 謙一殿
- 一金 壹千円也 藤崎 繁生殿
- 一金 壹千円也 藤重 太市殿
- 一金 壹千円也 森上 博殿
- 一金 貳千円也 森山芦太郎殿
- 銀 芳典殿
- 藏田 桂治殿
- 松重 義一殿



# 話の真宗のやさしい

第39回

八月六日の朝、仏教文化講座の講師山口大学の村田先生を駅頭にお見送りした時のことです。駅の待合室の時計が発車時刻を過ぎて改札が始められました。そこで、先生が駅の改札掛にこの列車は遅れているのかとたずねられますと、

駅員はおくれています。ん定刻ですと答えました。先生は、それでもこの時計はと、待合室の柱時計を指さして、既に発車時刻を過ぎているよと云われると、駅員は時計を見あげてのち、だまって改札をつづけました。私はこの情景を遠くから眺めて、先生の面目躍如たるものありと、ひそかにほほえみました。それというのも、先生を知らない人がこれを眺めたらキチョウメンな旅の老人のおせつかいにしか映りませ

んでしたでしょうが、前日の講話で、仏教徒の信条として、『不殺生』『生命尊重』（ものいのちを大切にすること）を力説せられた先生の気概にふれた私にとっては、それは単なるおせっかいでなくして、師

の信念から出たものとうけとられたからです。げに、『時計の生命』は『時刻の正確な表示』にあります。デタラメな時刻を示す時計には、時計としての生命がありません。そこで、公衆の前に掲げてある時計が常に『正確』であることは、時計の生命が尊重せられていふことになりま

仏教のいましめの第一である『不殺生』は単にものいのちを殺さないということから一步進んで、『生命尊重』とものいのちを大切にすることにあります。ものにはそれぞれの役目をもったいのちがあります。それが、その役目を尊重することとが、とりもなおさずそのものいのちを大切にすることにになります。

私はその朝、駅に着くとすぐに待合室の柱時計の時刻にマチガイを感じ、駅員室の柱時計と見くらべましたら六分進んでいました。しかし、その誤差を駅員に告げることがテレくさくてだまっていたが、いかなる小事もおろそかにしない先生は、それを指摘するだけの勇氣をもっておられました。

最後に、駅員さんの誠実をたたえるために書きをえます。私はその日の夕方、所用があつて、再び駅をおとすれました。そして、再び待合室の柱時計を見ましたら、いつのまに

か寸秒の誤差もなく訂正せられていました。待合室の柱時計のいのちは『正確』になったことによつてよみがえつたのです。私は一個のものがわぬ時計のいのちがすぐわれたことをこよなくうれしく感じました。

## 御芳志

◎ 年回 その他

◎ 葬儀・中陰・永代経

- |           |        |           |        |
|-----------|--------|-----------|--------|
| 一金 貳千円也   | 崎本 高市殿 | 一金 貳千円也   | 村重東洋司殿 |
| 一金 参千円也   | 藤本 保殿  | 一金 貳千円也   | 山本 次郎殿 |
| 一金 貳千円也   | 榎島 浦一殿 | 一金 貳千円也   | 貞田 陸生殿 |
| 一金 貳千五百円也 | 沼田 信雄殿 | 一金 貳千円也   | 土井 イネ殿 |
| 一金 壹千円也   | 佐伊木 茂殿 | 一金 貳千円也   | 藤中 新殿  |
| 一金 壹千円也   | 杉本 覚殿  | 一金 貳千円也   | 通谷 正純殿 |
| 一金 壹千円也   | 二ノ本武男殿 | 一金 貳千五百円也 | 山本 春香殿 |
| 一金 壹千八百円也 | 村中 義人殿 |           | 山近 哲夫殿 |
| 一金 壹千円也   | 上田 繁人殿 |           | 三井 繁治殿 |
| 一金 貳千円也   | 山元 省三殿 |           |        |
| 一金 壹千円也   | 尾下 悟逸殿 |           |        |
| 一金 壹千円也   | 木村八重子殿 |           |        |
| 一金 五千円也   | 高林あやめ殿 |           |        |
| 一金 貳千四百円也 | 野原 十吉殿 |           |        |
| 一金 貳千円也   | 米田 伎殿  |           |        |
- 
- |           |        |
|-----------|--------|
| ◎ 葬儀・中陰   | 父のため   |
| 一金 参万円也   | 村岡 克也殿 |
| 一金 貳万二千円也 | 母のため   |
| 黒磯        | 末弘 幾茂殿 |
| 一金 貳万七千円也 | 妻のため   |
| 青木        | 弘本 館一殿 |
| ◎ 葬儀・中陰   | 妻のため   |
| 尾津        | 松村 健一殿 |







# 話の真宗の せ

第41回

大正五年生れの私は、今年教え年で五十才になりました。孔子（コウシ）さまの言葉を借りますと、  
「五十にして天命（テンメイ）を知る」

これは、この世を五十年生きるとも人生有限（何事にも限りがある）の真相がだんだんわかってくるということでしょう。

晩秋に七十六才の母を失った私もこの年輪のささやきがかすかに聞えてくるようです。そこで、今年の元旦の集いに署名した年頭の言葉は『知命讚仏』（チメイサンブツ）でした。どだい言葉にない言葉です。直に気持ちを卒直に文字にして書いたものです。

さて、天命を知ることは直ちに死の連想に及びます。その死は臨終の苦悶々という気味悪きものとなり、更に不可解なる死後の世界への問いになります。

「人間死んだらどうなるのか」

太古以来、幾億億幾千万億の先人が嘆き且つ問いつづけてきた問題です。この問に対する答は世上にいろいろあります。

或る人は「人間死んだらそれでおしまい、灰がのこるだけ」  
或る人は「天国に召されるのだから、或る人は死んだらゴクラクに生れる」

いずれも確信のない答えです。真宗はこれについていかに答えているのでしよう。一口に云えば『往生』（オウジョウ）。しかし、真宗で説かれていた往生の真意は、世人の考えている死んだらゴクラク往生とは天地の差があります。

心往生として往生の上には必ず信心の二文字がついています。その信心とはナムアマミダブツを信ずる信念であり、それはこの世に生きていた時に、ナムアマミダブツの大生命にふれることです。

所で、ナムアマミダブツは単なるマジナイコトバではありません。みほとけの真実の大生命が声となりコトバとなってあらわれたものです。そして、ふれるということはいかなることかと云えば、ナムアマミダブツの教えを説く説法のご縁にたびたびあることです。しかしてみほとけの真実の大生命にふれるものは、生きてよし、死してよし、死後の問題はこ

の世において決着が付きません。祖師しんらんさまはこれを『大信心は長生不死の神方なり』とうけとられました。長生不死——死して死せず——これぞ人間のひたすらなる悲願であり、みほとけのゆるぎなき誓願であります。

## 御芳志

一 金 貳千円也	田中 豊殿	一 金 貳千五百円也	時藤トヨノ殿	一 金 貳千五百円也	松中 保殿	一 金 貳千円也	参千円也	村岡 旭殿
一 金 貳千五百円也	岡村 裕殿	一 金 貳千円也	村重 由隆殿	一 金 貳千五百円也	大倉 善助殿	一 金 貳千円也	参千円也	後川 文雄殿
一 金 貳千円也	岸本 善助殿	一 金 貳千五百円也	大倉 政江殿	一 金 貳千円也	松中 保殿	一 金 貳千円也	参千円也	藤尾 正義殿
一 金 貳千五百円也	松中 保殿	一 金 貳千五百円也	賀屋 茂一殿	一 金 貳千円也	白田 公美殿	一 金 貳千円也	参千円也	松村 健一殿
一 金 貳千五百円也	高重 順吉殿	一 金 貳千円也	松本 正一殿	一 金 貳千円也	和泉 国雄殿	一 金 貳千円也	参千円也	米本 武雄殿
一 金 貳千五百円也	布重みよ子殿	一 金 貳千円也	川本 淳殿	一 金 貳千円也	岩中 政見殿	一 金 貳千円也	参千円也	神村ノブヨ殿
一 金 貳千円也	舟津リカノ殿	一 金 貳千円也	南 町	一 金 貳千円也	南 町	一 金 貳千円也	参千円也	村岡 旭殿
一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	南 町	一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	参千円也	後川 文雄殿
一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	南 町	一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	参千円也	藤尾 正義殿
一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	南 町	一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	参千円也	松村 健一殿
一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	南 町	一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	参千円也	米本 武雄殿
一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	南 町	一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	参千円也	神村ノブヨ殿
一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	南 町	一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	参千円也	村岡 旭殿
一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	南 町	一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	参千円也	後川 文雄殿
一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	南 町	一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	参千円也	藤尾 正義殿
一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	南 町	一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	参千円也	松村 健一殿
一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	南 町	一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	参千円也	米本 武雄殿
一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	南 町	一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	参千円也	神村ノブヨ殿
一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	南 町	一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	参千円也	村岡 旭殿
一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	南 町	一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	参千円也	後川 文雄殿
一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	南 町	一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	参千円也	藤尾 正義殿
一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	南 町	一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	参千円也	松村 健一殿
一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	南 町	一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	参千円也	米本 武雄殿
一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	南 町	一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	参千円也	神村ノブヨ殿
一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	南 町	一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	参千円也	村岡 旭殿
一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	南 町	一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	参千円也	後川 文雄殿
一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	南 町	一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	参千円也	藤尾 正義殿
一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	南 町	一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	参千円也	松村 健一殿
一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	南 町	一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	参千円也	米本 武雄殿
一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	南 町	一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	参千円也	神村ノブヨ殿
一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	南 町	一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	参千円也	村岡 旭殿
一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	南 町	一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	参千円也	後川 文雄殿
一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	南 町	一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	参千円也	藤尾 正義殿
一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	南 町	一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	参千円也	松村 健一殿
一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	南 町	一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	参千円也	米本 武雄殿
一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	南 町	一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	参千円也	神村ノブヨ殿
一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	南 町	一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	参千円也	村岡 旭殿
一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	南 町	一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	参千円也	後川 文雄殿
一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	南 町	一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	参千円也	藤尾 正義殿
一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	南 町	一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	参千円也	松村 健一殿
一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	南 町	一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	参千円也	米本 武雄殿
一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	南 町	一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	参千円也	神村ノブヨ殿
一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	南 町	一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	参千円也	村岡 旭殿
一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	南 町	一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	参千円也	後川 文雄殿
一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	南 町	一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	参千円也	藤尾 正義殿
一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	南 町	一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	参千円也	松村 健一殿
一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	南 町	一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	参千円也	米本 武雄殿
一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	南 町	一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	参千円也	神村ノブヨ殿
一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	南 町	一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	参千円也	村岡 旭殿
一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	南 町	一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	参千円也	後川 文雄殿
一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	南 町	一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	参千円也	藤尾 正義殿
一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	南 町	一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	参千円也	松村 健一殿
一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	南 町	一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	参千円也	米本 武雄殿
一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	南 町	一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	参千円也	神村ノブヨ殿
一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	南 町	一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	参千円也	村岡 旭殿
一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	南 町	一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	参千円也	後川 文雄殿
一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	南 町	一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	参千円也	藤尾 正義殿
一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	南 町	一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	参千円也	松村 健一殿
一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	南 町	一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	参千円也	米本 武雄殿
一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	南 町	一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	参千円也	神村ノブヨ殿
一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	南 町	一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	参千円也	村岡 旭殿
一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	南 町	一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	参千円也	後川 文雄殿
一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	南 町	一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	参千円也	藤尾 正義殿
一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	南 町	一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	参千円也	松村 健一殿
一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	南 町	一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	参千円也	米本 武雄殿
一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	南 町	一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	参千円也	神村ノブヨ殿
一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	南 町	一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	参千円也	村岡 旭殿
一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	南 町	一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	参千円也	後川 文雄殿
一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	南 町	一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	参千円也	藤尾 正義殿
一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	南 町	一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	参千円也	松村 健一殿
一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	南 町	一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	参千円也	米本 武雄殿
一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	南 町	一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	参千円也	神村ノブヨ殿
一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	南 町	一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	参千円也	村岡 旭殿
一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	南 町	一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	参千円也	後川 文雄殿
一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	南 町	一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	参千円也	藤尾 正義殿
一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	南 町	一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	参千円也	松村 健一殿
一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	南 町	一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	参千円也	米本 武雄殿
一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	南 町	一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	参千円也	神村ノブヨ殿
一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	南 町	一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	参千円也	村岡 旭殿
一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	南 町	一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	参千円也	後川 文雄殿
一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	南 町	一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	参千円也	藤尾 正義殿
一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	南 町	一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	参千円也	松村 健一殿
一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	南 町	一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	参千円也	米本 武雄殿
一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	南 町	一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	参千円也	神村ノブヨ殿
一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	南 町	一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	参千円也	村岡 旭殿
一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	南 町	一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	参千円也	後川 文雄殿
一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	南 町	一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	参千円也	藤尾 正義殿
一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	南 町	一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	参千円也	松村 健一殿
一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	南 町	一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	参千円也	米本 武雄殿
一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	南 町	一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	参千円也	神村ノブヨ殿
一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	南 町	一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	参千円也	村岡 旭殿
一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	南 町	一 金 貳千円也	末広 精志殿	一 金 貳千円也	参千円也	

# 話の真宗のやさしい

## — 第 4 2 回 —

三月になると、日本国中の家庭が進学入試の話題でにぎわいます。希望校にうまく入学できたことを喜び、あり家庭もあれば、失意の中に暗いカゲを宿す家庭もあります。しかし、それよりもなお家庭の事情で、進学の希望を捨てざるを得ぬ少年少女の数あることをも忘れてはなりません。次の歌は、そうした境遇にある一人の少女の作になるものです。

さびしい時には目を  
をつむろう  
マブタのウラには  
広い世界がある  
悲しい時には手を  
あわそう  
胸の中には光りが  
ある

この歌の作者は、  
カタイナカに住む歌  
の好きな少女です。  
この少女は中学しか  
出ていない貧しい家庭の娘です。幼  
くして母をうしなひ、病床にある父  
と中学一年の弟との三人暮らし。わず  
かな田畑と近所のお手つだいでぼそ  
ぼそと暮しを立てています。感じや  
すい年頃の娘。高校へ進学したお友  
達のほがらかな笑い声を耳にすれば、  
みずからの貧しさにいつしか心は沈  
みがち。そんな時、この少女は目を  
つむり両手をあわせて悲しみをこえ  
るのです。「胸の中に光りがある」  
なんとというほのぼのとした喜びでし  
よう。この少女は胸の中の光りをみ  
つけることによってすくわれるので  
す。

しんらんさまは、ほとけさまのこ  
とを、光りのほとけさまとうけとら  
れました。ほとけさまは、教えの言  
葉を通して私達の心のヤミを照らし  
あかるい心の光りとなられるからで  
す。  
そこで真宗ではク聴聞(チヨウモ  
ン)オ一クク聞法(モンボウ)オ一  
クといひ、みほとけの教えを聞く  
ことを最も大切にします。それは教  
えを聞くことによつて、みほとけの  
光りにふれることができるからです。  
光りにふれるものは光りの中にある  
自身を発見して、こよなき喜びと安  
らぎをおぼえます。  
しんらんさまの歌を一つ

### 御芳志

◎年回 その他

- 一金 貳千円也 北本 近衛殿
- 一金 參千円也 内藤 重利殿
- 一金 壹千円也 松本 林治殿
- 一金 壹千円也 重岡キミ子殿
- 一金 壹千円也 中本 俊則殿
- 一金 壹千円也 白木 賢殿
- 一金 壹千円也 松宮 六郎殿
- 一金 壹千円也 白木 修殿
- 一金 貳千円也 緞広 ツタ殿
- 一金 壹千円也 広中 吉三殿
- 一金 壹千七百円也 村岡 忠雄殿
- 一金 壹千円也 山元 浩殿
- 一金 貳千円也 橋本 シモ殿
- 一金 壹千円也 岡野 順一殿
- 一金 貳千円也 津秋 夏江殿
- 一金 壹千円也 野原 隆殿
- 一金 壹千七百円也 木村 猛殿
- 一金 壹千四百円也 灰谷 明夫殿
- 一金 壹千五百円也 神田キミコ殿
- 一金 壹千円也 森岡 晷殿
- 一金 壹千円也 大崎 忠夫殿
- 一金 壹千五百円也 津谷 哲彦殿
- 一金 貳千円也 穴水 忠生殿
- 一金 壹千五百円也 松重 義一殿

◎葬儀 中陰

- 一金 壹千円也 河田 政人殿
- 一金 參千円也 松本 信雄殿
- 一金 貳千円也 村岡 春人殿
- 一金 壹千五百円也 岸本 善助殿
- 一金 壹千円也 吉屋 悟殿
- 一金 壹千五百円也 野原 輝人殿
- 一金 壹千円也 村重 博文殿
- 一金 貳万五千円也 母のため
- 北町 益富 輝美殿
- 七千円也 産児のため
- 牛の谷 村本 希一殿
- 壹万參千円也 打覆三点
- 泉迫 岡崎 員人殿

◎葬儀 中陰 永代経

- 一金 四万五千円也 伯母のため
- 本町 佐々江浩一殿
- 參万貳千円也 夫のため
- 保津 土井アサエ殿





# 話の宗真 第43回

近年、お寺参りの老人が次々と他界せられ、法座が次才にさびしくなりました。あとをつぐ人が少なくなりました。以前には、人間年をとれば、誰しも宗教心がよみがえるからあとつぎの心配はいらんとすましていきましたが、もうそういった楽観は吹きとんで、容易ならざる事態なりと気がつき始めました。

真宗人口の減少化。真宗教団にとってゆゑしき大問題です。それかといつて、宗教を捨てて、社会風潮の中にあつては、その対策もまた極めて困難なことです。どこから手をつけてよいかわからぬといつた実状です。ここに於いて教団では、幼児保育と組みあわせて、ほとけの子供を育てましようが教化目標の一つに掲げられました。幼児は正直です。白紙です。何事も素直に受けとります。その上三つ子のタマシイ百まで、幼児期の環境がその人の生涯の半分をきめるとあつては、幼児に、

を植付けることは大切なことです。キミヨウと申します。されば、拝む心は、ほとけのいのちの世界に帰る、ということ。今日、科学文明の発達は目ざましく便利な時代になりました。しかし、人心はゆるおいを失って、干からびたすさまじい風が吹きまくり、いいよりのない孤独感の中に立たされていきます。結局、心の中に帰る世界を持たないからです。ここに於いて、生きる時も死する時も、幼き時も老いたる時も、安心して帰ってゆける心ふるさとを持つことの意味がでてきます。

固く信じて止みません。

## 御芳志

◎ 年回 その他

- 一金 貳千円也 浅井 昭三殿
- 一金 貳千円也 田村 義信殿
- 一金 壹千五百円也 賀屋 市郎殿
- 一金 壹千円也 清水 武殿
- 一金 貳千円也 岡崎 栄殿
- 一金 貳千円也 杉中 与殿
- 一金 貳千円也 西岡 甚一殿
- 一金 貳千円也 篠田 葉盤殿
- 一金 貳千円也 白木 晋一殿
- 一金 貳千円也 岡部 定殿
- 一金 貳千円也 村河 助雄殿
- 一金 貳千円也 半田 繁助殿
- 一金 壹千円也 岡 千代野殿
- 一金 貳千円也 土井 保殿
- 一金 貳千円也 野上 茂殿
- 一金 壹千円也 伊崎 正良殿
- 一金 参千円也 赤崎 登殿
- 一金 壹千五百円也 中柴 内義殿
- 一金 参千円也 赤崎 忠義殿
- 一金 貳千円也 岩中 政見殿
- 一金 壹千円也 竹上千代子殿

◎ 永代経

- 一金 貳千円也 松村 清一殿
- 一金 壹千円也 榎本 俊殿
- 一金 壹千円也 高林 雅信殿
- 一金 貳千円也 吳田 英雄殿
- 一金 貳千円也 杉本 昇殿
- 一金 壹千円也 村岡 旭殿
- 一金 壹千円也 赤崎 久子殿
- 一金 貳千円也 松村 久雄殿
- 一金 壹万円也 母のため
- 在ハワイ 大武 ハル殿
- 青木 森田 語一殿
- 八千円也 娘のため
- 参千円也 祖父のため
- 黒磯 藤木 保殿

◎ 葬儀 中陰

- 壹万五千円也 妻のため
- 壹万二千円也 養父のため
- 泉泊 岸本 圭二殿
- 貳万二千円也 父のため
- 青木 向井マツエ殿

# 話の真宗のやさしい

## 第44回

夏がくると「あつい、あつい」の連発で、それが日常のあいさつになつていきます。しかし、ひとたび眼を戸外に転じてみますと、夏の自然には目をみはらされるものがあります。たくましくおいしげる雑草、ぐんぐ

んのびる稲の茎。

中でも感心するのはカボチャであります。

四月にまたいた小さな

タネが七月になると、

青いツルが屋根まで

のびて、人の頭ほどの

カボチャをたくさん

ならしています。

カボチャをみるとあ

の小さなタネがよく

も、こんなに大き

くなって、人間のた

べものになることよ

と、その生命力のは

げしさにおどろきま

す。そして今更なが

ら「もののいのち」

ということについて

考えさせられます。

いのち(生命)——それは「い

のちあつてのモノダネ」というコト

バで語られているように「長生きす

る」ということが基本になっていま

す。しかし、「いのち」とは何かと問われれば、単に「長生きさえすれ

ばよい」と答えることのみがほんとうの答えにはなりません。むしろ「いのち」とは、内にみちみちていきいきとしたチカラを云うのであります。されば、干からびて何のへンテツもない一個のカボチャのタネも、いのちがあれば、夏の天地にふれた時、巨大な怪物のように地面にぐんぐんはびこってゆくのです。

ナムアミダブもその通りです。蓮

女(レンニヨ)さま「ナムアミダブは

口にとなえればただ一声。文字に書

いてもたった六つの字。何のへンテ

ツもないマジナイコトバのようであ

るが、この一声のネンブツ、六つの

字のみ名の中には甚深微妙の広大な

みほとけの生命力がこめられている

』と説かれています。しかも、その

偉大な生命力のこめられているナム

アミダブのはたらき場所私達の心

の世界です。それ故、ナムアミダブ

の教えに親しみ、それを信ずるもの

の心の上にナムアミダブのいのちは

躍動するのです。

されば蓮女さまは「ナムアミダブ

はいさみのネンブツなり」と喝破せ

られ、多くの先信同行は「生きなば

ネンブツとなえん、死なば浄土に

生れなん」と驚喜しました。そこに

は本能的な生命の執着はミジンもな

く、永遠の世界に没入する感動があ

るのみです。

### 御芳志

◎ 年回 その他

一金	式千円也	村中	秀一殿	一金	式千円也	土井	貢殿
一金	式千円也	村中	武男殿	一金	式千円也	高林	勇次殿
一金	壹千円也	岸村	為雄殿	一金	式千五百円也	井原	義郎殿
一金	壹千円也	米本寿佐計殿	測殿	一金	式千円也	高林	雅信殿
一金	壹千円也	藤本	形一殿	◎	葬儀・永代経・中陰	高重	俊吾殿
一金	壹千円也	村重	由隆殿	一金	式萬円也	祖母のため	
一金	参千円也	村中	静殿	郷		村中	慶吉殿
一金	式千円也	増田	勉殿	黒磯		祖母のため	
一金	式千円也	平井	勝子殿	八萬円也		弟のため	
一金	式千円也	小泉	篤実殿	新町		井原	克朗殿
一金	壹千円也	小山	巖殿	式萬円也		養母のため	
一金	参千円也	兼国	繁殿	新町		米重	忠見殿
一金	式千円也	岡村	哲夫殿	◎	葬儀・中陰		
一金	壹千五百円也	森本	正人殿				
一金	式千円也	中崎	隆殿				
一金	式千円也	吉柴	常雄殿	長野		父のため	
一金	参千円也	広重	照殿	九千円也		村上	司殿
一金	式千円也	橋本	春一殿	本呂尾		母のため	
一金	壹千円也	野原	博司殿			藤川	清殿
一金	式千円也	土井アサエ殿					
一金	式千円也	古川	勇二殿				
一金	四千円也	国重	一夫殿				
一金	参千円也	野原	平一殿				
一金	壹千五百円也	村重源太郎殿					
一金		藤崎	米子殿				





# 話の真宗のやさしい

## 第45回

去る八月六、七、八の三日間、広島  
の某寺で開かれた「ゲンバク二十  
周年記念」の仏教を聞く青年と若婦  
人会の主催になる仏教講演会の講  
師に招かれました。

会場の某寺には本堂の回りに墓地

がありまして。三百  
の門徒で八百のゲン  
バク死者を出したお  
寺だけあって、夜明  
けの五時から参詣者  
があり、香煙が二階  
の客室にまで立ちこ  
めて早くから目をさ  
まされました。

墓前にぬかづく人  
と物いわぬ墓石。互  
いに思い出をうなづ  
きあっている姿をみ  
れば胸が熱くなりま  
した。

所で、よく耳にす  
るコトバに『人間死  
んだら灰になるだけ  
』というのを聞きま  
す。これはいかにも

さとりきつたようであるが、ゲンシ  
ユクな『死』の実体を正確にとらえ  
たものではなく『死ガイ』の末路を  
指さしたものです。時の流れ、人の  
世の流れを苦に生きている私達の死  
を『灰』で片づけられては落ちつか

ぬものがあります。『死』はもっ  
と深き思いで考えられなければなり  
ません。

蓮如さまは『后生（ゴシヨウ）の  
一大事を心にかけてミダをたのめ』  
と教えられました。『后生』と云え

ば、今の人はすぐに『死后』と答え  
て、死んだ未来に用事はない、フレ  
ラの関心事はこの世の一大事になる、  
どうやってもうけるか、どうやって  
暮しを立てるかにあると逆襲します。  
しかし、仏教では生ける姿を正し  
くとりえるために、死の観点に立つ  
ことを教えられます。死の観点に立  
って人生を考えたと時、生きる暮しの  
毎日、そのままたびゆく死の大方  
進です。その死への大行進を生への  
大行進とマチガエている所に人間の  
深い迷いがあります。

かくしてみると、死の大行進をつ  
づけているものなれば、金銭、財産、  
名声といったこの世のタカラはネウ  
チが半減します。この世にしか通用  
しないものなるがためです。この世  
とあの世の両方に通じるタカラこそ

真実のタカラモノです。  
しんらんさまは、ナムアミダブを  
無上宝珠の名号とたたえられました。  
それはこの世とあの世の両方に通用  
するタカラモノなるがためです。こ

のナムアミダブのタカラをわが胸に  
うけとるとこの世の暮しがラクにな

### 御芳志

◎一年回 その他

一金	貳千円也	田中	隆生殿	◎	附	吟	川本	淳殿
一金	貳千円也	赤崎	忠殿	◎	附	吟	土井	保殿
一金	参千円也	中崎徳太郎殿		◎	附	吟	吉柴	常雄殿
一金	参千円也	杉中	与殿	◎	附	吟	土井	正信殿
一金	貳千円也	岡林	茂殿	◎	附	吟	松中	定殿
一金	貳千円也	末弘	幾茂殿	◎	附	吟	高島	文子殿
一金	貳千円也	岸井	義成殿	◎	附	吟	父のため	
一金	貳千五百円也	山元	浩殿	◎	附	吟	村岡	克也殿
一金	貳千五百円也	山元	省三殿	◎	附	吟	父のため	
一金	貳千五百円也	沼田	展治殿	◎	附	吟	蒲原	友一殿
一金	貳千五百円也	上田	繁人殿	◎	附	吟	妻年回につき	
一金	貳千円也	富士田完一殿		◎	附	吟	松村	健一殿
一金	貳千円也	村中	次郎殿	◎	附	吟	先祖のため	
一金	参千円也	黒田	ツヤ殿	◎	附	吟	朝本	智博殿
一金	貳千円也	野原	隆殿	◎	附	吟	朝本	智博殿
一金	貳千五百円也	木村八重子殿		◎	附	吟	朝本	智博殿
一金	貳千円也	白木	寿殿	◎	附	吟	朝本	智博殿
一金	貳千円也	竹田	範生殿	◎	附	吟	妻のため	
一金	貳千円也	竹中	虎夫殿	◎	附	吟	妻のため	
一金	貳千円也	谷川	谷次殿	◎	附	吟	妻のため	
一金	貳千円也	弘本	諱一殿	◎	附	吟	妻のため	
一金	貳千円也	村上	カル殿	◎	附	吟	妻のため	
一金	貳千円也	土井	義人殿	◎	附	吟	妻のため	
一金	貳千円也	岸村	為雄殿	◎	附	吟	妻のため	
一金	貳千円也	山近	哲夫殿	◎	附	吟	妻のため	

# 話の真宗のやさしい

## 第46回

「ウソを言うな、正直（シヨウジキ）にせよ」ということは、小学校の時から教えられていることで、常識的には誰にでもわかっていることです。しかし、どんな場合にでもウソを言うまいとするのは大変なこと

で、普通に考えていることよりもはるかにむづかしいことです。正直一つ身につけるにも人生は余りにも短かすぎます。」

これは前京都大学総長平沢 興先生のおことばです。

まことにその通り。正直であらねばならぬことは誰でも知っています。しかし「正直者はバカを見る」「バカ正直」「ウソも方便」などと、正直であることをあざ笑うコトバもたくさん出ています。

『貧乏人は麦（ムギ）を喰え』『私はウソを喰え』という有名な言葉

は申しません」という有名な言葉をのこした池田前首相は「ブコツな正直者」として好感を寄せられました。その池田さんも去る八月十三日「突然（トツゼン）」亡くなられました。私は「突然」と言いましたが、身近

の人には一年前からわかっていたことです。しかし、その時の主治医は「ガンではない、治療すればなおる」とのことでした。所で池田さんの死後発表されたことは、冥はあれは「ウソ」で「方便（ホウベン）」であったということ。人間の正直がいかにむづかしいことであるかこればかりです。

正直であるためにはヨホドのチエと勇気の修煉ができていないとできません。

しんらんさまは、或る人が「私ほど愚かで浅ましきものがこの世にあるか」と嘆いた告白を聞いて、

「私とてもその通り。年とって病気でもすると、このまま死ぬるのではないかと心ほそくなり、早くお浄土へ参りたいなどという殊勝な心は吹きとんでしまう。これは我欲のボンノウのせいである。所が、考えてみれば、みほとけは私達のことをよくよく御存知で、ボンノウ具足の凡夫と呼ばれている。してみれば、私達の浅ましき姿を見るにつけ、おたすけに間違いないことがはっきりしている」と答えられました。

真宗は片苦しい宗教ではございません。人間のいつわらざる感情をおし殺すものではなく、それを正しい方向にみちびかれるものであります。

### 御芳志

◎ 年回 その他

一金	貳千円也	森重	安一殿	一金	参千円也	土井	和久殿
一金	貳千円也	畝狭	藤人殿	一金	五千元也	父のため	
一金	貳千円也	山根	優殿	一金	六呂師	岡林	洋二殿
一金	貳千五百円也	竹重	盛生殿	一金	貳千円也	佐々江	浩一殿
一金	壹千円也	佐井木	清人殿	○	永代経	西岡	甚一殿
一金	壹千円也	水上	金之殿	一金	貳萬円也	田名加	浩殿
一金	壹千五百円也	小方	初一殿	○	六呂師	松村	久雄殿
一金	参千円也	藤重	唯義殿	妻のため		沖好	繁殿
一金	参千円也	太田	文次殿	村岡	貞介殿	有田	吾一殿
一金	参千円也	村中	正生殿	○	葬儀 永代経、中陰		
一金	貳千円也	野原	信康殿	一金	貳万七千元也	祖母のため	
一金	壹千円也	谷川	谷次殿	一金	本呂尾	深井	晃殿
一金	壹千円也	村河	助雄殿	一金	参万六千元也	養父のため	
一金	壹千円也	村重	賢治殿	黒磯		季広	行康殿
一金	壹千円也	藤中	利介殿	壹万八千元也		父のため	
一金	参千円也	角井	英次殿	本町		森山	椽一殿
一金	貳千円也	神田	九一殿	郷	壹万七千元也	父のため	
一金	参千円也	楊井	淳殿	郷		里原	誠殿
一金	壹千円也	佐伊木	茂殿	保津	貳万円也	養母のため	
一金	壹千円也	井川	豊信殿	藤生	壹万八千元也	村中	次郎殿
一金	貳千円也	藤本	杉男殿	藤生		愛児のため	
一金	参千円也	広重	春三殿	藤生		藤中	典殿
一金	参千円也	朝本	智博殿	郷	参万円也	父のため	
一金	壹千円也	村上	ツヤ殿	郷		西岡	清美殿
一金	壹千円也	藤重	静一殿				



# 話の真宗のやさしい

## 第47回

このたびの本堂屋根工事の時、古瓦をおろすのにこういものが出てきましたと、工事人が持つて来たものを見ると、四枚の古瓦にそれぞれ次の年号が刻みこまれていました。

天明四年(百八十年前)、天保三年(百三十年前)

、明治二十四年(八十五年前)、大正十年(四十五年前)、

思うにこれらの刻字は、本堂の屋根を修繕した時の記念にそれぞれ年号を刻入したものでありましよう。しかし、それは単に年号の刻入にとどまらず、その

の並々ならぬ懇念が脈打っているのであります。これを伝統といっているのであります。これにもかくにも、専徳寺の本堂が今日健在であることは、長い時代の人々の念力によつて

ささえられて来ていることの証左であります。

私達はかかる先人の努力によつて今日のあることを思えば、先人の偉業に敬意を表すると共に、これから生れ出てくる子孫に対しても、「責任を持つ」ことの重大さを痛感します。

所で、「責任を持つ」ということになれば「あみだほとけさま」の宣言ほど真実なるものはありません。私達が責任を持つ場合、「いいか

まかしとけ」と大きく胸を叩いても、事と次第によれば、どう風向きが変るかわからないあやしげなるものになり易いのであります。『あみださま』の「まかしとけ」の宣言は大地を打つツチははづれてもこの一言にくるいはありません。その「あみださま」の宣言を一口にあらわされて『ナオアミダブツ』。この『ナオアミダブツ』の宣言は、私達の「迷えるいのち——苦しみや悲しみを作り出す命」を「真実のいのち——永遠の喜びとしあわせを作り出す命」に転成する大きなはたらきを秘めていた宣言であります。

### 御芳志

◎年回 その他

- 一金 貳千円也 穴水 徳幸殿
- 一金 壹千五百円也 三井 佳宣殿
- 一金 貳千円也 賀屋 茂一殿
- 一金 貳千円也 大倉 政江殿
- 一金 貳千円也 富士川 嘉人殿
- 一金 壹千五百円也 尾上 慶二殿
- 一金 貳千五百円也 本井 ツネ殿
- 一金 貳千円也 村本 希一殿
- 一金 貳千円也 通谷 正純殿
- 一金 参千円也 村中 正生殿
- 一金 参千円也 末広 精志殿
- 一金 貳千円也 有田 吾一殿
- 一金 貳千円也 角井 弥太郎殿
- 一金 壹千五百円也 秋島 勇一殿
- 一金 貳千円也 広田 尚敏殿
- 一金 参千円也 今村 正雄殿
- 一金 参千円也 村本 惠美子殿
- 一金 貳千三百円也 益富 輝美殿
- 一金 貳千円也 村岡 善一殿
- 一金 壹千五百円也 村中 博殿
- 一金 壹千五百円也 岸村 圭二殿
- 一金 貳千円也 土井 アサエ殿
- 一金 貳千円也 賀屋 躰殿

- ◎永代経
  - 一金 壹万円也 母のため
  - 彦根市 河井 しづ殿
- ◎葬儀、永代経、中陰
  - 一金 貳万五千円也 妻のため
  - 南町 岩重 宗治殿
  - 保津 水上 静生殿
  - 参万貳千円也 祖母のため
  - 黒磯 村岡 克也殿
  - 式万五千円也 母のため
  - 黒磯 藤重 春治殿

### 園児募集

- ◎年令 満二才以上
- ◎募集人員 三十名
- ◎入切 二月末日
- (くわしいことは事務所まで)

### 音楽教室生徒募集

- ◎年令 四才以上
- ◎オルガン科 初級、中級
- ◎ピアノ科 近く開設の予定
- (くわしいことは事務所まで)

# 話の真宗のやさしい

## 第48回

ヒノエウマの年には騒動が多いといわれますが、二月三月の相次ぐ旅客機の遭難には全く驚きました。この事故によって、機械文明の世にあつては、便利なものほど生命の危険が大きいという皮肉な現象をいやというほど知らされる

と共に、一瞬のうち霧散霧消する人の身のはかなさを嘆かすにはおられません。まことに一寸先はヤミクというコトワザが私達の身の上にとりつきまします。

いのち——生命——一寿命。私達にとって何が大切だといつても、いのちにまさるべきものはありません。いのちあつてのモノダネクであり、死んで花実は咲かないのであります。それ故、私達は

日夜めいめいのいのちの保存に苦勞するのであります。所が、その大切な生命がお先まっ暗とあつては悲痛の極みであります。一体どうすればよいのでしょうか。或る人はいいます。太う短う生きるに限る。しかし、問題はそれで根本的に解決するでしょうか。それは余りにも無智なステパチなコトバではないでしょうか。結局、人間はいかにかしくても、かかる人生の根本問題——いかに生き、いかに死するか——という大問題にぶちあたると、全く無力でおろかなものであるとの活見本がこの言葉でありま

す。人生の根本問題——これと立ち向うには人間の常識は通用しません。どうしてもよき人の教えを聞かなければなりません。よき人しんらんさまは、聞々に生きるものにとつて最もこのもしきものは光りなりとて、光りのホトケサマであるナモアミダブを胸に念じて生きられました。ナモアミダブ、ナモアミダブ——しんらんさまにとつてそれはなつかしきみ親の呼び声です。このみ親の呼び声に目ざめた時、明日をも知れぬはかなき身が、そのままみ親と共に永劫の世に生きる身であることを発見して驚喜するのであります。子供の時、父からならつたうろおぼえの歌があります。

メクラがチヨウチン買いに来た  
メクラにチヨウチンいるものか、  
メクラにチヨウチンいらぬが、  
メアキがメクラにつきあたる  
お先まっ暗のメクラの身にも、チ

ヨウチンのあかりがあれば安心です。胸にナモアミダブの光りを念ずれば、この世が心強く、チカラ強く、あかるく生きてゆかれるのであります。

### 御芳志

#### ◎ 年回 その他

- 一金 貳千円也 佐々江浩一殿
- 一金 貳千円也 高林あやめ殿
- 一金 貳千円也 岡崎 員人殿
- 一金 參千円也 米田 輝水殿
- 一金 貳千円也 木村 徹殿
- 一金 五千円也 半田 繁助殿
- 一金 貳千円也 吉柴 常雄殿
- 一金 貳千円也 岩中 都守殿
- 一金 貳千円也 白田 公美殿
- 一金 貳千円也 樹元 義明殿
- 一金 貳千円也 大多和 殿
- 一金 壹千五百円也 岡崎 栄殿
- 一金 貳千円也 村中 繁雄殿
- 一金 壹千五百円也 米田 伎殿
- 一金 貳千円也 弘中 磯殿
- 一金 貳千円也 松重 ハル殿
- 一金 貳千円也 藤本 勝殿

#### ◎ 葬儀 永代経 中陰

- 一金 壹千五百円也 秋島 勇一殿
- 一金 參千円也 吉兼 卓美殿
- 一金 貳千五百円也 木村 一二三殿
- 一金 參千円也 国重 一夫殿
- 一金 貳千円也 上田 繁人殿

#### ◎ 葬儀 中陰

- 一金 貳万五千円也 愛息のため
- 黒 磯 森重 安一殿
- 黒 磯 弘中 磯殿
- 南 町 橋本 キク殿
- ◎ 葬儀 中陰
- 黒 磯 愛児のため
- 黒 磯 藤重 博殿





# 話の真宗の (第49回)

四月二十九日の教蓮寺における御門さまの御親教には心打たるものが多々ありました。御法話の中で、御門さまは、祖師の宗教的開眼の帰結について語られました。それは一口に言えば『仏恩報謝』(ブツト

ンホウシヤ)ということですが、有名な恩徳讃(オンドクサン)にうたわれてゐる如來大悲(ニョライダイヒ)の恩徳は身を粉にしても報ずべし、骨をくだきても謝すべし々々につきます。

ところで、『御恩』(ゴオン)とか『感謝のころ』とかは、人間の高度な精神内容を示すものでもあります。普通には、ありがたや々々もつたいなや々々おかげさまで々々ということばであらわされています。それは言い知れ

ています。そして、それは言い知れぬ満足感(マンゾクカン)——よかつた、よかつたという満ちたりた喜びの心がなければ、ほんとうに腹の底から出ることはありません。不足、不満、グチの感情の中からは、

決してスナオにできることばではないのです。それだけに、々々謝恩々々感ではなく世の中をおだやかに落ちつける貴重なタカラモノであります。

ところで、同じく御恩々々々々恩々(ブツトン)になるとなかなかわかりにくくなります。父母師長の恩、先祖の恩、社会の恩、天地万物の恩は、われわれの人生経験の上で割合うなびきやすく身近かにうけとられるのであります。が、仏恩々々々々來大悲(ニョライダイヒ)の恩徳々々々々となると、チンブンカンブンわからなくなるのが大多数、いや極言すれば、百人中百人みんなわからんとい

ってさしつかえないほど人間の常識ではとらえにくいのであります。それは、人間の生活経験からとらえられたものではなく、みほとけの大悲心から流れ出たものであるからです。それ故、仏法の教えを聞き、仏法に親んではじめて開ける智慧の境界であります。同時に、それは、人間の本質々々人生の真相々々に心眼の開けたことに一脈通じるものがあります。人間は心の深い性根(シヨウウ

ネ)において、罪ふかく浅ましきものであり、われらの生きる世界は、はかなさいのちをかかえてさまようものであるという人間の本质と人生の真相に目ざめる時、みほとけあり

てその全生命をナモアマダブとしてあらわれたもうことの意義が、このもしくたのもしく受けとられてくるのであります。

静かに考えてみますと、この世の中で一体、どれだけの人がほんとうに充ち足りて生きているでしょうか。あの日本一の成功者豊臣秀吉でさえ死ぬる時は、々々露と落ち露と消えゆくわがいのち、ナニワのことは夢のまた夢々々ときびしくこの世を立っていったではありませんか。結局、これあるがために喜んで死んでゆけるタカラものをつかんでいないからです。私達が日夜苦勞してつかんでいるものは、すべてこれ々々に死せん時はかかれてたのみおきつる囊子も財宝もわが身には一つとしてないことあるべからず、なまじけ

ないことに、この世にみんな置いてゆかされるものばかりです。その点、ナモアマダブはこの世にもあの世にも通じるタカラモノです。これあるがために喜んで死んでゆけるタカラものです。されば、仏恩々々々々はみほとけの全生命の打ちこまれたナモアマダブを受けとった心において感ぜられる喜びの声であります。

御芳志

- 一金 参千円也 田名加鹿義殿
- 一金 参千円也 神田 象一殿
- 一金 参千円也 山崎 修殿
- 一金 参千五百円也 野原 輝人殿
- 一金 参千五百円也 津秋 敏夫殿
- 一金 参千五百円也 佐々刃義隆殿
- 一金 参千五百円也 藤重 決殿
- 一金 参千五百円也 土井 林一殿
- 一金 参千円也 白田 博殿
- 一金 参千円也 高林あやめ殿
- 一金 参千円也 村中 慶吉殿
- 一金 参千円也 高林 勇次殿
- 一金 参千円也 井川 豊信殿
- 一金 参千円也 西里 源一殿
- 一金 参千円也 木村 進殿
- 一金 参千五百円也 井原 克朗殿
- 一金 参千五百円也 白木 寿殿
- 一金 参千円也 今井 進殿
- 一金 参千円也 村井 助治殿
- 一金 参千円也 木村 猛殿
- 一金 参千円也 村中 仲二殿
- 一金 参千円也 村上 司殿
- 一金 参千八百円也 河井 和彌殿
- 一金 参千円也 河本 律雄殿
- ◎ 参万円也 中陰 母のため
- 青 木 新川 優殿
- 保 津 伯父のため
- 参万五千円也 穴水 忠生殿
- 参万五千円也 父のため
- 青 木 村本 忠殿
- 宋 広 幾茂殿
- 森 田 和夫殿
- 杉 本 昇殿

# やさしい真宗の話

## 第50回

武者小路実篤先生の著書の中に次のような一節があります。  
 「自分は五穀(ゴコク)や野菜が一年の間に、あのように成長し、増殖し、そして人間に生きる糧(カテ)を与えてくれることに感心するのだ。」

こんなことはあたりまえだと思ふ人があるかも知れない。たしかにあたりまえであろう。  
 しかし小さい種が大地におちて、どう言うチカラであんなにまで生長し、いろいろな姿をし、又いろいろな味と質をもつことが出来るかを考えると、何処からそのチカラが出てくるのか不思議に思ふ。不思議でも事実が事実である。

そしていろいろなものがあり、根のよきもの、葉のよきもの、花のよきもの、実のよきものがある、私たちの生活を豊富にしてくれることを感謝するものである」

この言葉は直接宗教を語るものではありませんが、宗教の世界に一脉相通するものがあります。一粒の米、一枚の葉っぱ、一片の花ピラの中に、無限の生命力を感じるということが、実は宗教的開眼の世界に通じるからであります。

私達はとかく物事のネウチをうわべの現象によって簡単に決めたいが、クセがあります。月給の多い人が偉い人で、月給の少ない人がおろか者。点数をたくさんとった生徒が優等生で、少い生徒が劣等生。こいうい見方考え方もあながち無理からぬことではあります。それだけではこの世は余りにもわびしくつまらぬものとなります。

私達の暮らしを心ゆたらかに過ごすためには、日常見聞する些細のものの中に秘められた無限の意味を読みとる智慧を持たねばなりません。かかる智慧あれば、この世は実に妙味あるものであり、喜び多きものであります。

しんらんさまは真宗のナムアマミダブを信じる信心を「智慧の信心」「智慧の念仏」とうたわれました。一句のナムアマミダブの中に秘められて、いるみほとけの無限の智慧と生命力を読みとる智慧は、やがて私達の暮らしの中に波及して、あらゆる事象の上に、喜びの声となり、感謝の心と

なって、限りなくひろがってゆくのであります。

### 御芳志

◎ 年 回      その他

一金 貳千円也      河本 サダ殿  
 一金 貳千円也      賀屋 誠殿

◎ 葬儀 永代経 中陰

一金 五萬貳千円也      父のため

一金 四万円也      藤重 文雄殿

一金 北町      愛児のため

一金 山田      白井 清澄殿

一金 参万五千円也      長男のため

一金 山田      重村 保殿

一金 参万六千円也      父のため

◎ 葬儀 中陰      村重 総一殿

一金 参万七千円也      母のため

◎ 永代経      広本 博殿

一金 老万円也      長男のため

黒磯      石原 庄市殿

雅信殿      貢殿

高重 力殿      薫殿

弘中 只一殿      小方 初一殿

松上 千歳殿      松重 義一殿

松村 清一殿      村中 次郎殿





# 話の真宗のやさしい

## 第51回

今年には選挙の当り年といわれています。その手始めは一月二十九日の衆議院議員選挙。公示と同時に、各候補者、各政党的舌戦の火ぶたが切られています。人間は言葉によって自分の意志を他人に伝える武器を持つていますので、それを有効に活用するわけです。

所で、言葉は人間関係を結びつけるよき道具ではありませんが、これも悪用すると世の中を暗くします。したがって仏教では『口(クチ)はワザワイのモト』として、言葉の悪用をゲンにいましめられていきます。妄語(いつわり)、奇語(おべっか)、両舌(二枚舌)、悪口(わるくち)はその代表的なものです。

所で、私達はよき言葉、美しき言葉にはスナオに感動するものであります。反対に悪しき言葉、いやしき言葉には胸ふさがる思いがします。しかし、それにもかかわらず、

現実はずきずきもので、とかく人の世で日常口に出されたり、耳に聞かされてくるものは、よき言葉よりも悪しき言葉が多く、關心をそそがれるものは、美しき話でなくして、いやしき話であるようです。

ことにしても、仏教では『沈黙』(チンモク)の美德を称揚されます。黙(ダマ)ることは人間最大の力(チカラ)であり、勇気であり、勝利であるとして、沈黙を云ネとする宗旨(禪宗)さえあります。私達の暮の中で、むつかしい人間関係の中にあっても、『ののしられて黙る笑われて黙る』。これには並々ならぬ『知恵』と『勇氣』がなければできません。

真宗は『みほとけの教えを聞く宗旨』といわれています。『聞く』といえは、直ち『おしゃべり』が連想されますが、実際に『教えを聞く』心構えの底には、『黙々』(モクモク)の世界が要求されます。自らの意志を押えて教えの言葉に静かに耳を傾ける。ここにみほとけのお心にふれる近道があります。

現代はマスコミの時代として、自己表現、自己主張がぶつかりあい、朝から晩までばげしき雑音の中に立たされていきます。それだけに私達は少しでも私自身の『黙々』の世界を持ちたいものです。『黙々』はそのま

ま『自分に帰る』安定の世界であるからです。

最後に古き歌を一つ。  
ほとけはつねにいませども  
うつつならぬぞあわれなる  
人の普せぬあかつきに  
ほのかに夢に見えたもう

### 御 芳 志

◎ 年回 その他

- 一金 貳千円也 木村 登殿
- 一金 貳千五百円也 有田 吾一殿
- 一金 五千円也 広重 辰男殿
- 一金 貳千円也 高林 勇次殿
- 一金 參千五百円也 末広 精志殿
- 一金 四千円也 今村 正雄殿
- 一金 貳千円也 藤重 鎮雄殿
- 一金 貳千円也 藤重 博殿
- 一金 貳千円也 藤尾 正義殿
- 一金 五千円也 岡迫 孝雄殿
- 一金 參千円也 岸井 義成殿
- 一金 貳千円也 伊原 繁人殿
- 一金 貳千円也 岡崎 寿雄殿
- 一金 貳千円也 白木 政生殿
- 一金 貳千円也 時藤 測殿
- 一金 貳千円也 松重 ハル殿
- 一金 貳千円也 松本 嘉市殿

◎ 葬儀、中陰

- 一金 貳千円也 田坂 真清殿
- 一金 貳千五百円也 益富 輝美殿
- 一金 貳千円也 土井アサエ殿
- 一金 貳千円也 土井 和久殿
- 一金 參千円也 弘中 磯殿
- 一金 參千円也 藤重 実一殿
- 一金 貳千円也 尾上 慶生殿
- 一金 五千円也 森重 安一殿
- 一金 貳千円也 吉兼 貞子殿
- 一金 參千円也 原多 法生殿
- 一金 貳千円也 畝狭 宇吉殿
- 一金 貳千円也 木村 信一殿
- 一金 貳千五百円也 秋島 勇一殿
- 一金 貳千円也 佐々江浩一殿
- 一金 五千円也 賀屋 公之殿
- 一金 貳千五百円也 村井 仲人殿
- 一金 壹万八千円也 父のため
- 黒磯 尾下 殿
- 一金 貳万五千円也 兄のため
- 六呂師 蔵田 隣一殿
- 保津 妻のため
- 土井早太郎殿



# やさしい真宗の話

## 第52回



一月末の衆議院議員選挙に引きつづき、四月には統一地方選挙が行なわれて、ここしばらくは選挙でにぎわいます。その選挙の話題の一つに、近頃特に目ざましいある宗教団体の政界進出があります。その宗教団体は、みずからの宗教を誇る一方、他の宗旨を徹底的にコキおろす性格があるようです。

所で、こういう仕打ちに対して、わが浄土真宗は伝統的にどういうふうな受けとってきたでしょうか。それについては、蓮如上人の『御文章』(ゴブンショウ)や唯円(ユイエ)師の『教異抄』(タンニシヨウ)

(約七百年前のもの)という書物の中に時折見られる所でありますが、ここでは祖師しんらんさまの言行を主題にした唯円師の『教異抄』の一節を引用してみます。

『わが宗こそすぐれひとの宗はおとるなりといふほどに、法敵(ホウテキ)もいってきたり謗法(ボウホウ)もおこるなり。』

たとい諸門(シヨモン)こそりて念仏(ネンブツ)はかいなき人のためなり。その宗浅しいやしというとも、さらに争はずして、われらがごとく下根(ゲコン)の凡夫(ボンブ)一文不通(イチモンフツウ)のもの、信ずればたすかるよしうけたまわりて信じそうらえば、さらに上根(ジョウコン)の人のためには、いやしくとも、われらがためには、最上の法にてまします。たとい自余の教法はすぐれたりとも、みづからがためには器量(キリョウ)およばざれば、つとめがたし。

われもひとと生死(シヨウジ)をはなれんことこそ諸仏(シヨブツ)の御本意(ゴホンイ)にておわしませば、おんさまたげあるべからずとて、にくい気せずば、誰の人もありて仇(アタ)をなすべからず。

この文章くりかえし読めば、ある程度意味がわかってきます。これを要すれば、一つには、かるがるしく他宗の悪

口をいうな。悪口をいえばそれだけ法の敵を作ったり、仏法そのものをキズつけることになる。

二つには、何宗を問わず、仏教の根本目的は生死解脱(シヨウゲダツ)にある。これを決して忘れてはならないということだ。

生死解脱とは、わたくしたちは、このシャバ世界を生きてゆく上に、毎日毎日たくさんのおぼろしい業(ゴウ)を作って生きています。そうした業苦の世界に沈んでいるわたくしたちを清浄真実(シヨウウジヨウシンジツ)の世界に安住せしめんと願うとはたらきに生きたもうおかたがみほとけの真意であります。その真意を受けとってゆくことが、仏教を受けとる上の根本態度であります。

こういう観点に立てば、他宗を排したり、そしったり、シャクフクしたりして法の敵を作ることがなくなるでしょう。

### ◎ 葬儀 中陰志

- 一金 参万円也 母のため 高林 勇次殿
- 一金 参万五千円也 母のため 河本 賢一殿
- 一金 北町 河本 賢一殿
- 一金 本町 土井 敏子殿
- 一金 壹万四千元也 夫のため 土井 敏子殿

### ◎ 永代経志

- 一金 式万円也 伯母のため 藤生 岡迫 孝雄殿

### ◎ 御芳志

- 一金 四千元也 沼田 展治殿
- 一金 参千元也 今西 孫一殿





# やさしい真宗の話

## 第五十三回

さる日曜日の朝のテレビに『青年の宗教観』と題する番組がありました。その中で、現代青年は宗教に無関心であることについて、座談会に出席している青年達に司会者がそのわけをたづねたところ、一人の青年が『生活のプラスにならないから』と答えました。これに対し、ある外人大学教授が次のような意見を述べました。

『生活のプラスになるならないということは、一種の御利益(ゴリヤク)主義である。宗教とか信仰の世に御利益主義(ゴリヤクシユギ)は禁物(キンモツ)である。宗教とか信仰とかのネウチを直ちにゴリヤクと結びつけて考えること自体が誤りである。なんとすれば、宗教は人間の心の底の深い問題についてこたえるものであって、それを生活の手段としてあつかうべきではない』

これは大変興味深いことばです。それは現代人の生活意識の中には、生活のプラスになるかどうかということが物事のネウチをきめる大きな基準になっています。それ故、生活

のプラスになるものについては、寝食を忘れ、万全を投じても惜しまないが、プラスにならないものについては、ビター文出すことも惜しむし、また無関心であります。それはそれでよいのであります。それをそのまま宗教の価値判断に持ちこむことが突は大きな誤りであることをこの外人教授は指摘したものであります。

ここで私達は、『生活』ということばの意味について考えてみたいと思います。普通、生活といえは、『生きる』『メシが喰える』『金がある』というところが中心になっていきますが、仏教では、これを『生老病死』(シヨウロウビョウシ)ということばであらわされています。生はうまれる、老は年をとることににおいてなやみのたねはつきぬ。病は病気。死は死ぬる。さすれば、この世に生まれ、生きることにいて、人生行路は決してなまやさしいものではない。苦勞の山坂、涙の谷はのがれられぬということでありませう。

こんで、その宗教に入信すれば、病気がなおる、災難がまぬがれるとまことしやかに説き伏せますが、まことの教えはそういう口先のゴマカシでなしに、ハダカの人生、いつわらざるまことのすがたをきびしく見つめる知恵をあたえられるものであります。

或る人のことばに、

『病気になることが悪いのではない。病氣して人生に絶望することがこわいのだ。』

災難にあうことが悪いのではない。災難におびえる弱い心がこわいのだ。うしなっていた自分をとりもどし、人生の真実を見いだそう』

また有名な良寛さんは、

『病氣の時は病氣にかかるがよろしかるべくそうろう。災難にあう時は災難にあうがよろしかるべくそうろう。死ぬる時は死ぬるがよろしかるべくそうろう』

これらのことばは、いづれも人生の真実なるすがたに眼が開け、それを越える道を心得ておけばこそいえることばであります。

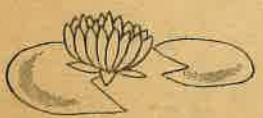
しんらんさまは、『ナモアミダブ』のみ名には、みほとけの知恵と慈悲(ジヒ)がこめられてあると説かれています。みほとけの知恵はハダカの人生を見つめることのできる知恵となり、みほとけの慈悲は、苦し

みの海、涙の谷を渡るチカラとなつてはたらしめます。それは『ナモアミダブ』のみ名のいわれを聞き、そのお心をすなおにうけとることにいて、私達の知恵となりチカラとなります。

されば、真宗では『信心をもって本(ホン)となす』といわれているように、『ナモアミダブ』のおいわれを聞き、そのお心をすなおにうけとることを一番大切なことにいたします。それは、人生生活の根本である『生老病死』を越える道はただ一つ、『信心』において解決するからであります。

### おことわり

本号は『真宗の話』が長くなりましたので、『御芳志』の掲載をお休みにいたします。



# やさしい真宗の話

## 第五十四回

恩をしのび、お寺の法座に足を運んで、みほとけの教えをよくよく聞くこと、それが仏教で示された「孝行」であり、「ご先祖への感謝」であります。

おぼん。  
多くの日本人がいかに仏教徒らしくふるまう数日間であるといわれています。

所が、おぼんの意味についてはあまり理解せられていないようです。おぼんの意味は一口にいえば、「孝行の日」「ご先祖に感謝する日」であります。

このおぼんの起りは「うらぼん経」という経典から出たものであります。それによると、おシヤカさまの十大弟子の一人に目蓮（モクレン）さまというりっぱなお方がありました。この方は神通力（ジンヅウリキ）にすぐれ、心の眼が開けて何でも手にとるようにわかります。或日、亡き父母のことが気にかかり、神通眼でこれをさぐると、父は好人物であったので死後もよい所へ落着いておられたが、母はジャケンで欲の深い人であったので、ガキ道（ドウ）に落ちて苦んでいました。目蓮さまは母の姿を悲しんで、おシヤカさまに

お母さまの救われる道をたづねられました。おシヤカさまは七月十五日の衆僧反省の日に、衆僧に供養（クヨウ）するがよいと孝養の道を教えられました。そのみ教え通り大衆供養をすると、その母はガキの苦しみをのがれて天上界に生れ、目蓮さまはたいへん喜んだという七世に及ぶ先祖への孝養の道を説かれたものが「うらぼん経」であります。

所で、目蓮さまは自分の母がガキの苦しみから救われたことを喜ぶだけではなく後の世の人々が父母祖先の救われる道をつづけておシヤカさまにたづねました。おシヤカさまはその質問のよいことをたいへんほめられて、七月十五日を父母祖先供養の日とすることを説かれました。

### 御 芳 志



◎ 年回その他

◎ 永代経志

一 金	参千円也	白井	清澄殿	一 金	壹万円也	先祖のため
一 金	貳千円也	広重	春三殿	一 金	黒磯	有田 吾一殿
一 金	四千元也	重村	保殿	◎	葬儀・中陰志	
一 金	参千円也	榎島	浦一殿	一 金	壹万七千元也	夫のため
一 金	貳千円也	米重	健造殿	一 金	参千円也	村中 文字殿
一 金	参千円也	賀屋	靖一殿	一 金	参万円也	養父のため
一 金	貳千円也	増田	勉殿	一 金	黒磯	地中 光吉殿
一 金	貳千円也	村岡	潔殿			
一 金	五千元也	野上	和夫殿			
一 金	貳千円也	田畑	孝子殿			
一 金	貳千円也	藤重	豊殿			
一 金	貳千円也	金子	忠殿			
一 金	貳千五百円也	有田	吾一殿			
一 金	参千円也	藤本	勝殿			





